

# 常陽新聞

発行所 常陽新聞社

本社 〒300-0051  
土浦市真鍋2丁目7番6号  
電話 0298-21-1780(代)  
FAX 0298-22-6743  
水戸支社 〒310-0063  
水戸市五軒町1丁目5番48号  
電話 029-221-6420(代)  
FAX 029-221-6474  
東京支社 〒104-0061  
東京都中央区銀座2-10-8  
大日ビル3階  
電話 03-5565-0530  
FAX 03-3543-3478

©常陽新聞社 2000

## 霞ヶ浦発

### 「わたしの一冊」

22

財団法人土木研究センター  
風土工学研究所長(工学博士)

竹林 征三

私は建設省に奉職し、河川技術に係わる業務に長年従事してきた。大津(滋賀県)にある建設省の琵琶湖工事事務所長の時、第一回の世界湖沼会議が開催され、霞ヶ浦で開催された我が国で二回目の湖沼会議(一九九五年)の時は、建設省土木研究所の環境部長ということで湖沼の問題にドップリ浸かっていた。

もともとダム建設技術に係わる仕事が多かった。ダムは人工の湖沼をつくる仕事なので湖沼の環境問題とは縁が切れそうにない。土木研究所のダム部長から環境部長に変わった折、多様多面で錯綜(さくそう)し、混乱している環境問題を体系的に論じることが現時点で最も重要な課題であると考

えた。環境技術に関する本を手当たり次第に読みあさった。近藤次郎先生の「環境技術読本」という小冊子の最後の方に、東洋の古典に環境を把える思想があることを二、三行書かれていた。そう言われれば、般若心経の二

百六十二文字の中の、眼耳鼻舌身の六文字は環境の受容器官そのものではないか、環境事象を認知する六感そのものであることにハッと気づいた。なるほど、眼耳鼻舌身のスケルトンで環境事象をシステム化すれば、ランドスケープとかサウンドスケープとかと

# 心の悩みと環境問題の構造

が、中村元先生の「佛教語大辞典」である。重い仏教語大辞典を片時も離さず大きなカバンに入れ



なりに、何のことを言っているのかあでもない、こゝでもない、こゝで解釈してみよう。このよう

キリスト教やマホメット教は一神教であり、その唯一の神が自然全てを作った。その神の存在は疑ってはならず、唯一の神の存在を信じないから始まるので百パーセント宗教ということになる。

【たけやし・せいぞろ】一九四三年九月生まれ。九一年四月建設省土木研究所ダム部長、九四年四月同環境部長、九六年四月同地質官を経て、九七年四月より現職。環境問題をさらに突き進めると風土問題になる。土木工学と風土文化との接点を求める工学として、風土とハーモニ

て把握できるではないか。六感の環境学である。錯綜している環境論をシステム化する知恵は東洋の知恵、就中(なかならず)、仏教の経典にあることに気づいたのである。

中村元著『佛教語大辞典』(全三巻)、『図説佛教語大辞典』

めんの考察を深めてきている。仏教の教典も当初より精密な構造を突き止めているのではない。考察を深めるうちに緻密(ちみつ)な構造を突き止めてきていることが理解できた。そして人の心の悩みの構造と地球の悩みである環境問題の構造は全くアナロジーであることに気が付いたのである。

信じなさいの手前の部分がある。その思考プロセスは自然哲学そのものであるということに気が付いたのである。

風土は全くアナロジーの概念であり、環境のアプローチに心のやりとりを付加すれば風土のシステムが解ける。そのようなことより体系づけたのが「風土工学序説」である。

しからば膨大な仏教の経典からその箇所をどう見つけ出すか。仏教経典など縁がなかった身にとっ

持ち歩く日が続いた。仏教語の原義はサンスクリット語なのであるが、一応漢字の概念でその大略は理解できる。不断

そして仏教が自然とは何かの考察を進める過程は西洋のギリシャ哲学の考察の過程そのものと何ら

「東洋の知恵の環境学」である。環境のシステム化の次の課題が風土のシステム化である。環境と

\* 『佛教語大辞典』全三巻、『図説佛教語大辞典』は中村元著、東京書籍刊(一九八一年)